春雨物語「死首のゑがほ」論

勝　倉　壽　一

一

「死首のゑがほ」は，明和四年十二月三日，山城国愛宕郡一乗寺村で起こった妹斬首事件，いわゆる源太騒動に取材したものである。この騒動は，一乗寺村の百姓渡辺源太（当時26歳）が，同族の渡辺団次（同56歳）の継嗣で同村の庄屋右内（同20歳）と妹やゑ（同17歳）の縁組が不調であったために，右内方に乗り込み，右内不在によって団次の面前で妹を斬り捨てた衝撃的な事件であった。事件当時大阪の堂島に住み，『雨月物語』の完成に没頭していた秋成は，この「目ざまし草」に「かゝるますら雄も世にはあんなるは」と感嘆の声を発したが，その感動が直ちに創作意欲に転じることはなかった。

やがて，約四十年後の文化三年四月十七日，一乗寺村円光寺の東照宮例祭の折に，図らずも今は老境に達して静穏・濶達な心境にある渡辺源太と対面する機会を得た秋成は，往年の感動を呼び起こされて「ますらを物語」(仮題) を草している。これは，同事件に取材した建部綾足の『西山物語』の過度な物語的潤色を排して，「まさし事」の源太騒動を語るべく執筆されたのであったが，浅野三平氏が調査・紹介された両渡辺家の過去帳や家伝類，[1] 野間光辰氏が分析・紹介された当時の裁判記録「百箇条調書」所載の京都町奉行所の伺書と幕府評定所の答申書[2]に照らしても，大筋で秋成自身が「いつはりならぬ語言」と自負するにふさわしい内容を備えていた。[3] しかし，それから二年後の文化五年三月に一応の完成を見た『春雨物語』の一篇として，秋成は再び同事件に取材した「死首のゑがほ」という作品を加えているのである。

この作品は，事件の骨格と人物の配置は事実に拠りながらも，人物像の細部的な設定や事件の具体的な展開，舞台などを大幅に改変して，「ますらを物語」とは異なる濃厚な物語的潤色を施している。そのために，一般に，この作品は実説から離れて，鯖江五曽次（団次）の吝嗇無情な人間性のために裂かれた五蔵（右内）と宗（やゑ）の純愛悲劇を軸に，五蔵への愛に生きる宗と，愛情と義理に悩みながら意志を貫く五蔵，宗の斬首という衝撃的な行為によって応えた兄元助（源太）と母親（つや）の丈夫心を描いたものと理解されている。従って，登場人物の性格が明確に描き分けられたために「大衆小説的気味」[4]があり，「ますらを物語」の「二番煎じ」[5]で，「大衆の嬉ぶ甘い恋愛小説に仕立てた」[6]と評されるなど，その評価は総じて低い。

このような評価を生む根拠としては，次の諸点を挙げることが出来よう。

裁判記録によれば，この斬首事件はやゑの「身持放埒」「右内と密通」「母江対し不孝」の三罪状に対し，源太が母親の命を受けて親の私的懲罰権を代行したものとして処理されている。これに対して，秋成は二人の仲を源太母子が認めた許婚関係に設定して封建婦道との倫理的対立から解放し，恋愛悲劇的な性格を強めている。また，事実準拠を意図した「ますらを物語」も大筋では恋愛物語的な内容を持っていたが，右内の柔弱な人間像への不信と絶望から自律的に死を決意する弟姫（やゑ，宗）と，その婦道への節義の死を幇助する源太母子の苛烈なますらを精神が濃厚に現われている。これに対し，「死首のゑがほ」は相愛関係にある宗の重病による婚礼の決行を描いたために，倫理的緊張は希薄になっている。更に，五曽次像は「鬼曽次」「父がおにおにしき」「鬼曽次あざ笑ひて」「鬼の口ありたけにはたけて」など，否定的な人間性が殊更に強調されて醜悪な人間像のイメージが定着し，「鬼曽次」と五蔵を「仏蔵殿」とよぶ対比的表現が五曽次に敵役的な位置を与えていることなどである。

しかし，「死首のゑがほ」における登場人物の設定と形象は，五曽次・五蔵父子像をはじめ，それほど単純ではない。

「鬼曽次」と否定的に描かれる敵役的人物を，酒造業界，町人道徳，七福神信仰など，その生活の

場に即して具体的に言動と事件への関与を捉え直すとすれば，作品はいかなる相貌を呈するであろうか。また，風雅で文武に秀でた五蔵も，その生活の場と事件に対する対応においては，完璧な人間像として理解しうるか疑問が残る。この点で，森山重雄氏が五曽次を「生活力にあふれた実生活者」，五蔵を「もっとも謎めいた人物」「理解を絶した沈黙の部分を秘めた人間」とする理解を示されたのは，[7] 恋愛悲劇の敵役的イメージから五曽次像を見直し，悲劇を招来する人間として五蔵を捉え直す契機として注目される。事件は，酒造業界の成功者である五曽次と，豊かな人間性が厳しい現実の前には挫折者としてしか発現しえない五蔵の対照を主軸に展開していく。「ますらを物語」に世俗倫理とますらを精神の厳酷な対立を描いて，事件の「いつはりならぬ語言」を書き終えた秋成が，二年を経ずして再び文芸的形象化をはかり，大幅な事実離れを試みた意図は複雑なものであったと思われる。

二

この作品を，五曽次・五蔵父子の人間像，人生観の対照において捉えようとする場合，五曽次の生活観を視点に分析するとどのようになるであろうか。物語は，五曽次父子の生活環境と，対照的な人間像の紹介から始まる。

> 津の国兎原の郡宇奈五の丘は，むかし〔より〕一里よく住（み）つきて，鯖江氏の人ことに多かり。酒つくる事をわたらひとする人多きが中に，五曽次と云（ふ）家殊に賑はしく，秋はいな春歌の声，此前の海に響きて，海の神を驚かすべし。一人子あり，五蔵といふ。父に似ずうまれつき，宮古人にて，手書（き），歌や文このみ習ひ，弓とりては翅を射おとし，かたちに似ぬ心たけくて，さりとも人の為ならん事を常思ひて，交りゐやゐやしく，貧しきをあはれびて、力を添（ふ）る事をつとめとするほどに，父がおにおにしきを鬼曽次とよび，子は仏蔵殿とたうとびて，人此もとに，先休らふを心よしとて，同じ家の中に，曽次が所へはよりこぬ事となるを，父はいかりて，無やうのものには茶も飲（ま）すまじき事，門に入（る）壁におしおきて，まなこ光らせ，征し〔あら〕がひけり。[8]

何代も続いた旧家が集まり，特に鯖江一族と酒造家が多い宇奈五の里は，同族・同業者間の婚姻が多く，家柄や経済力が有力な要素をなす，伝統的な生活観が因襲化した土地柄を想像させる。また，活気と利徳の気に溢れた商業地帯として設定されている。従って，その中心であり，一族の成功者である五曽次は，卓抜な経営能力を持ち，致富を唯一絶対の価値とする商業道徳に忠実な実業家と，地域社会の有力者を兼ねる存在であった。吝嗇無情な人間性を非難される五曽次の人間像は，この面から複合的に理解される必要がある。

次いで，酒造家の後継者を運命づけられた五蔵の，商業者にはふさわしくない人間性，やがて自ら悲劇を招いてしまう複雑な人間像が細叙される。書道，和歌，漢学の修得に励み，武道に勝れ，礼儀正しく，慈悲心の厚い理想的な人間として紹介される五蔵の人間像は，五曽次の信奉する町人道徳やその生活観から見れば，むしろ否定的な側面が浮かび上がる。

風流韻事を好み，好学心豊かな五蔵は，「過活心な」く，漁師の家の「羈物」（厄介者），「徒者」（余計者）であった『雨月物語』「蛇性の婬」の豊雄像を想起させる。しかし，酒造家の継嗣である五蔵に余計者の自由はない。町人世界にあっては，学問への好尚は無益・有害な浪費であった。「おのれが部屋には書物とかいふもの高くつみ，夜は油火かゝげて無やくの費する。」「元の商人よびて価とれ。親のしらぬ事知りて，何かする。」という五曽次の非難は，町人学者西川如見が「町人の子に生まれて町人の家職をいやしみいとい，父母の家を出て，一向仕官俸禄の望み有ての学問ならば，其主意既に道理にたがへり。」「学問還て身の害となれる類多し。」（町人囊・1）と説いて，町人の学問を家職のための実学に限ったのと同趣である。

また，如見は町人の武道好きを難じて，「武篇の働きは不孝の第一也。」「武道の心がけをやめて，他の一銭も卑怯なる心なきこそ，町人の武勇なれ」（同）と戒めている。武芸，信仰，遊芸を商業者に有害とする考えは，三井高房も「町人の武士の真似，神儒仏の道は，心裏の守りたりといへども，それにふかくはまる時は却て家を敗る。まして其外の遊芸をや。只暫も忘ざるものは家業なりとしるべし。」（町人考見録・跋）と説いているところでもあった。

五蔵の礼儀正しく慈悲深い人間性は，元助家と

の心の交流と，宗の信頼の絆をなすが，これも「算用なしに慈悲過たるも又愚なり，仁義を守り」「商に利有やうに心得べし。」(同) と説かれる商人道徳からは外れるものであった。そこに，五蔵の情操豊かな人間性が自然な発現を抑制され，全てが利徳のために割り切られる町人社会の現実が示されている。

ところで，五曽次を「鬼曽次」と諷する世俗の評判は，多分に感覚的・感情的な嫌悪感を含んだ外形的把握に止まるものであり，吝嗇という非難，婚姻拒否の無情性を批判する根拠としては問題が残る。五蔵が都会人的な趣味・教養の世界にあるのに対して，五曽次は生業の世界にあり，卓越した経営能力と徹底した生活管理，及び，勤勉な労働意欲などによって成功を得ていた。従って，五蔵の周囲に集う者たちは，太平の逸民的存在として，五曽次の眼には胡散臭い散財の種と映ることになる。

町人と武士の生活観の相違について，室鳩巣は「士は義を以て職と為し，商売は利を以て職と為す，義利の間に士商判る。是の故に士の重くする所は義なり。商の重んずる所は利なり。」(士説，原漢文) と説いて，利の否定の上に義を認めている。これは，近松が町人浄閑の科白として「侍は利徳を捨てて名を求め，町人は名を捨てて利徳を取り金銀をためる。是が道と申すもの」「なんぼう惜み貯へても死んでは帷子一枚とは，此の浄閑も知つたれども，死ぬまで金銀を神仏と貴ぶ，是が町人の天の道。」(山崎与次兵衛寿の門松) と語るところと表裏をなす。徹底した拝金主義と町人の道徳的頽廃を示す言葉であるが，一面，武士に対する町人の積極的な主張と肯定の意味も込められている。従って，「手遠きねがひを捨て近道に，それぞれの家職をはげむべし。福徳は其身の堅固に有，朝夕油断する事なかれ。殊更世の仁義を本として，神仏をまつるべし。是和国の風俗なり。」(日本永代蔵・1) と説かれるように，商売の精励，健康，町人道徳，信心に留意することが致富の方途とされたのである。

多分に否定的に戯画化される五曽次像は，このような商業世界の成功者の典型像であったと見てよい。生業に精励することが「町人の天の道」であり，教戒に従って家業に励む五蔵の渋染姿こそが，五曽次の理想的な生活形態であった。そこに「義を以て職と為」す武士の気風とは決定的に対立する商業者の生活観が示されている。

武士世界の賤金思想に対する批判を，秋成は既に『雨月物語』の「貧福論」で展開している。

> 恒の産なきは恒の心なし。百姓は勤て穀を出（だ）し，工匠等修てこれを助け，商売務めて此を通はし，おのれおのれが産を治め家を富して，祖を祭り子孫を謀る外，人たるもの何をか為ん。(中略) 弓矢とるますら雄も富貴は国の基なるをわすれ，あやしき計策をのみ調練て，ものを戕り人を傷ひ，おのが徳をうしなひて子孫を絶は，財を薄んじて名をおもしとする惑ひなり。

もちろん，本篇は五曽次側に立った金銭観を根底に置いて事件を描いているのではない。その利徳願望が悲劇の主たる要因であることは言うまでもないが，五曽次の言動が個人的な性向の強調だけではなく，町人世界に通有の生活観の表出として，「過活心な」い五蔵の生のあり様，町人社会の現実と抵触する恋愛と対置されていることは，留意しなければなるまい。

一方，事件の相手方である元助家は，宇奈五の里に住む同族で，家運衰えた小農として紹介される。僅かの田畑を耕作する元助と，家計を助けて機を織る母親，家事を手伝いながら書道・古物語などの修得に励む妹宗の姿は，『雨月物語』「菊花の約」の左門母子の清廉な生活をおもわせる。また，同族の医師靱屓が語る元助の「志たかき健男」的人間性，事件当日の脇差を帯びた正装，妹の首を斬り落とす手練の業，及び，娘と古物語を読む母親の素養，変事の急報に接した折の落ち着いた物腰などの設定は，この家が没落郷士の家系にあり，貧困のうちにも矜持と廉恥を重んじる武士的な気風が強く残存していることを窺わせる。実説の源太家は祖父正綱の代までは郷士であり，母つやも修学院郷士の娘であったことが取り入れられたか。

また，「志たかき健男」である元助の人間性は，その家風を代表する武士的精神として，以後の行動を律していく。しかし，その廉直の精神や心豊かな家風，宗の教養などは酒造家には無価値なものであり，靱屓による縁組の仲介は，五曽次の町人的な生活観・婚姻観の前に失敗に終わる。

婚姻を拒絶する理由として，五曽次は「我(が)

家には福の神の御宿申（し）たれば，あのあさましき者の娘呼（び）入（る）れば，神の御心にかなふまじ。」と述べており，五蔵に対しても「おのれは何神のつきて，親のきらふ者に契やふかき。」と責めている。吝嗇で無情・残酷な人間性を示すものとして，否定的理解の根拠にされる言辞である。しかし，これは個人的な金銭欲や酷薄な性情のみを指すのではなく，町人社会に通有の庶民信仰を背後に控えた欲望の表現と理解すべきではなかろうか。

江戸時代の庶民信仰は，町人の人生観，生活観と密接に結合している。「恋も無常も銀なくては成がた」いのが世の中であるから，「偽もけいはくも悪心も，皆貧よりおこ」(万の文反古)ることになる。道徳心も経済的豊かさが基礎になるという一種の唯物論哲学であり，「只家を富し眷族を撫育し長命を得て心に思ふ事なく臨末に及ばば，是則即身成仏といはむ」(町人考見録) など，金銀こそが神仏に勝る救いであるとする奇警な思想も生まれた。

従って，庶民信仰の実状は，「人皆欲の世なれば，若恵比須・大黒殿・毘沙門・弁才天に頼みをかけ，鉦の緒に取付，元手をねがひ」「世はみな富貴の神仏を祭る事，人のならはせなり」(日本永代蔵・4) という卑俗な現世信仰中心の宗教観が支配的であった。「信あれば徳ありと，仏につかへ神を祭る事，おろかなら」(同・2) ず信仰するのも致富の手段であり，そこには「神さへ銭もうけ只はならぬ世」(世間胸算用・1) という冷めた金銭哲学も底流していた。

作品中にみられる五曽次の福の神信仰を示す言辞は，「富貴の神仏を祭る」町人社会の「世のならはせ」に従った信仰心と思考・行動の表出であろう。しかも，その信仰心があらわな金銭欲の象徴となっている点で，欲に固まった庶民信仰の典型像をもなしていた。

五曽次が婚姻を拒否したのは，元助家との疎遠な関係や，宗の人間性，二人の恋愛への道徳的批判などによるのではなく，主に元助家の「久しく家衰へ」た運命，その家運を動かす「貧乏神」への畏怖と嫌悪という，江戸時代の都市社会に通有の庶民信仰上の忌避として語られている。もちろん，その信仰心はあくなき利徳願望を背景としたものではあるが，物語を五曽次の吝嗇で無情な人間性と恋愛の対立に単純化して捉えることには疑問が残る。致富を唯一絶対の価値であり，「天の道」として信奉する五曽次の徹底した町人的生活観と，「義」と廉恥・精神的充足を重視する元助家の武士的な気風との対立を前に，「想」と「実」の矛盾に挫折していく五蔵の複雑な人間性の発現に，物語の主たる展開があったからである。

三

縁組の仲介が不調に終わった時，五蔵は宗に「此事父母ゆるしたまはずとも，おもふ心あれば，必（ず）よ我よくせん」と励まし，その実行を誓っている。この誓言の実行は，貧困を理由に元助家が受けた恥辱への対応と，五蔵の誠実な人間性，及び事態を解決して現実を生き抜く力の証しとして，重い意味を持つことになる。

> 我，〔父〕に背きても，一たびの言葉たがへじ。山ふかき所にもはひかくれて，相むかひたらんが嬉しと思せ。こゝの母君せうとのゆるしたまへば，何の報かあらん。我（が）家は宝つみて，くづるまじき父の守り也。よき子養ひて，財宝まさせ給はんには，我（が）事忘れて，百年を保ち給ふべし。(中略) 山ふかくとも，海辺にすだれ垂（れ）こめて，世に在（る）人ともしられずとも，たゞ思ふ世を命にて，一二とせにても経なゝん。

これを見ると，誓言の具体的な実践の方法として，駆け落ちの決行が想定されていたのであろう。また，その行為を正当化する理由として，元助と母親の許諾と，養子縁組による酒造業の存続の可能性が挙げられている。実説のやゑは「身持放埒」「密通」「不孝」の罪に問われ，右内も「夫無之女与密通いたし誘引出しものゝ御定ニ准，三十日手鎖」の刑に処せられたが，秋成は二人を元助と母親が許諾した恋愛関係に改変して，不義・密通とする世俗的批判からの解放をはかっている。問題を封建倫理と恋愛の対立においてではなく，五蔵の人間性の矛盾関係に集中させる意図によるものであろう。

この改変は，免罪の証しとして五蔵を倫理的罪悪感の圧迫から解放する意味を持っていた。また，反面でその許諾は五蔵の心に誓約の実行を迫る無言の圧迫ともなっている。更に，彼は父親の堅実な経営手腕と，養子相続を酒造業の存続と家の隆昌のための適策として語り，実業界にふさわしく

ない自らの資質の認識と，後継者の定めからの逃避の願いを含ませている。

しかし，五曽次側から見れば，五蔵の行為は実説のやゑが問われた「放埒」「不孝」の罪に相当する。従って，五蔵は親の婚姻決定権，教令権に背いた行為を厳しく責め問われることになる。縁組の拒絶後も五蔵と宗の交際が続き，元助と母親の許諾のもとに恋愛関係が進行することは，酒造家の将来を危うくするものであり，宗の病気見舞いの折の外泊も，五曽次の怒りを増幅させることになる。五曽次は，私的懲戒権にあたる勘当を予告し，あるいは五蔵の漢学の知識とその儒教倫理に照らして厳しい追及を試みる。それは，家業を継承すべき者の責務を放棄した「放埒」な所行に対する処置として，町人世界には当然の教戒でもあった。

> 「おのれは何神のつきて，親のきらふ者に契やふかき。只今思ひたへよかし。さらずは，赤裸にて何処へ〔も〕ゆけ。不孝と云（ふ）事，おのれがよむ書物にはなきか」とて，声あらゝか也。（中略）「この柱くさらしよ。家を忘れ，親をかろしめ，身を亡すがよき事か。目代どのへせめかうじて，親子の縁断（つ）べし。物な云（ひ）そ」とて，おにおにしき事，いつより恐し。

五曽次の怒りには，法的制裁にあたる公的な懲戒権の行使さえ決意されていた。親の懲戒権の行使は，勘当，久離，義絶など，親子関係の断絶を意味し，公的には五人組立ち会いで町村役人に願い出て，その旨を勘当帳または久離帳に記載されることになる。その手続きを踏まない場合は内勘当で，事実上の放逐にあたる。五曽次の場合は公的勘当の通告にあたり，五蔵にとっては破局的な事態に面していたが，五曽次は妻の取りなしで「いかりにらみたるも，流石に子とおもひて」思い止まっている。そこに，五曽次の情的側面も認められよう。

五蔵が描いた養子縁組による家の隆盛の構図，駆け落ちという解決策が実現し難いことは自明であった。酒造家の一人息子という設定の重み，生業に精励することを求める父親の教令との決定的な対立関係に加えて，町人世界離脱の願望が実践に進みえない五蔵の薄弱な意志が決断を妨げるからである。従って，駆け落ち・隠棲の夢想の挫折は明らかであった。その人間性の矛盾関係は，母親の涙ながらの諫言に対する誓言に明瞭である。

> 「いかにも申（す）べき様ぞなき。若き身は生死のさたもすみやかにて，かなしからず。財宝もほしからず。父母につかへずして出（で）ゆかんが，わりなき事と思へば，只今，心をあらためてん。罪いかにも赦したうべよ」と云（ふ）つらつきまこと也。

この言葉は，先の「我，〔父〕に背きても，一たびの言葉たがへじ。」という宗，元助家への誓約との間に齟齬を感じさせる。宗への愛情と父母への「孝」の倫理の矛盾関係に悩み，その全的な解決をはかろうとする良心的な配慮が，むしろ悲劇を招来することになる複雑な人間性を示している。

五蔵が先に唯一の解決策とした宗との逃避行の誓い自体，「かたちに似ぬ心たけくて」と紹介される勇猛心，信念を貫き通す強固な意志の発現とはみなしがたい。また，「赦なき旅寝」（蛇性の婬）に相当する元助家への外泊は，苦悩に満ちた重大な時期の不注意な行動として，その場の情的なものに押し流される五蔵の意志の脆弱性を露呈している。他人の意向を顧慮しすぎる性格は，親への「孝」と愛情との間で優柔不断に傾くのである。

更に，母親の教戒に対する改心の誓いは，情死の決意と財産権の放棄，駆け落ちの意志を秘めた言葉であったが，むしろ，親子の情的，倫理的縁故に縛られて駆け落ちの決意をためらう，決断力の乏しさが認められる。そのために，この言葉は，五曽次夫婦には宗との決別の約束とも解される曖昧性を含んでいた。従って，五曽次から見れば事件は既に解決したことになり，事件当日の元助兄妹の意外な訪問に対した五曽次の，「妹に我（が）子が目かけしと云（ふ）事聞（き）しかば，つよくいさめて，今は心にも出（さ）ず。おのれ等狐のつきて狂ふか」という激怒と罵声を生むことになるのである。

一方，秋成は悲劇の外的な要因として，五蔵の計画を狂わせた不幸な運命を加える。秋から正月にかけて酒造業界は一年中で最も多忙な季節にあり，婚姻問題などは当然避けるべき時期にあたる。五曽次の気持は生業に集中し，「渋ぞめの裾たかくかゝげて，父の心をとる」五蔵の姿は大きな安堵

と満足を与えている。しかし，その背後で進行する宗の病状の悪化と，時期の不都合性のために，家業に精励することで婚姻問題の好転を期した五蔵の計画は再び挫折し，決定的な破局を迎えてしまうことになるのである。

宗の重態の報に急いで来訪し，事態が急迫していることを知った五蔵は，即座に翌朝の婚礼を決意する。

> 「かゝらんと思ふにたがはざりし事よ。後の世の事は，いつはりをしらねば頼まれず。たゞ此あした，我（が）家におくり給へ。千秋万代〔也〕とも，たゞかた時といふとも，同じ夫婦なるぞ。父母の前にて，入さきよからんぞ，せめて願ふ也。せうとの御心たのもしくはからひてたべ」と申（す）。元助いふ。「何事も仰のまゝにとり行ふべし。御宿の事よくして待（ち）たまへ」とて，悦び顔也。母も「いつの比，門出ぞと，待（ち）久しかりしを，あすときゝて心おちゐたる哉」とて，是もよろこびの立舞して，茶たき酒あたゝめて参らす。

「かゝらんと思ふにたがはざりし」とは，五蔵が宗の病状の悪化と破滅的な終局を予見していたことを意味するのであろう。その予想は「兼（ね）て思（ひ）し事」でもあり，生業につく事で事態の好転を期する己れの計画が実現不可能であることを予測していたことになる。従って，婚礼の取り決めは，病状の極度な悪化を前に，既に予測されていた計画の履行として決意されたものであった。婚礼は宗を「犬猫のさま」（ますらを物語）から救い，元助家の矜持を保つ道であり，五蔵自身の誠意と誓言の実行のための唯一の方法であったからである。ここにも，心ならずも成算のない婚礼を約して破局を招きよせる，挫折型の人間性が認められる。

ここで，「入さきよからんぞ，せめて願ふ也。」と語った五蔵の心情に注目しておく必要がある。従来，これを「入るさ」「きよからん」と読んで「嫁入の体が清い即ちさっぱりしていることだけ希望する」[9]とする解釈と，「入るさき」「よからん」と読んで「輿入れの形を整える意」[10]，「嫁に入った先方の家でよいこと」[11]を望む意，「両親の前で，婚礼を済ますことができるのがせめてもの願い」[12]とするなどの解釈が行われている。前者は宗をいたわる五蔵の慈愛深い性格を読み取り，後者は五曽次の侮辱を受けない婚礼仕度の希望と，五曽次の同意を得がたい婚礼を形式だけでも済ましたい心中の願いを吐露し，元助に対して五曽次の非礼を堪忍する度量を求めたものと解することになる。元助は五蔵の言葉を信頼して「御宿の事よくして待（ち）たまへ」と応じている。この約束は，やがて事件の場における元助，五蔵の言動と微妙に関わることになるのである。

ところで，婚礼を明朝に定めた元助の「悦び顔」と母親の安堵の言葉，「よろこびの立舞」などの振る舞いは，読む者の予感との間に齟齬を生み，不審の念を呼び起こすであろう。五曽次の拒絶の意志とその理由を熟知していた五蔵に，婚礼を円滑に行なう成算はなかったはずであり，その事情は源太母子にも明らかであった。また，事態が好転する兆しは全く認められず，むしろ酒造家の最も多忙な時期に，重病の宗を伴った突然の婚礼の要求は，生業に精励することを誓ったはずの子の裏切りへの憤りと，庶民信仰上の畏怖・嫌悪のために五曽次の怒りを掻き立て，事態を最悪の方向に導くことは自明であったからである。にもかかわらず，五蔵の婚礼の求めに応じた元助母子の心中には，既に別の厳酷な覚悟が存在していたと見なければなるまい。

四

この作品に登場する五人の当事者の形象と設定を分析するとき，各人が相互に異なる志向のもとに事件に関わってきたことが窺われる。

五曽次は，近世商業資本主義の原理を知り尽くした徹底的な遵奉者・成功者として登場し，酒造家の当然の道と庶民倫理を主張して，継嗣である五蔵に要求している。しかし，五曽次に対する公儀の裁断は，「たゞしつるに，『曽次は罪なきに似て，罪おもし。みすみすにおのが心のよからぬから，かゝる事仕出（で）たり。」「此事ことごとく五曹と曽次が罪におこる。此里に居らせじ。」というものであった。これは，『御定書百箇条』の「所払，在方は居村，江戸は居町払。但欠所無之，然共利欲に拘り候類は，田畑家敷欠所。」の条文による追放処分にあたる[13]。公儀の意向は町人の信奉する金銭主義を人間性の欠陥と重ねて処分するものであり，法の適用としては過酷の観がある。「曽次

が家の宝は，ふくの神とゝもにおほやけにめし上（げ）られたり。」「鬼曽次足ずりし，手を上（げ）てをらびなくさま，いと見ぐるし。」などの表現には，五曽次の徹底した町人意識と人間味を喪失した利徳願望に対する作者の諷刺と批判が込められており，公儀の処断にも作者の批判意識の影響が認められる。

一方，秋成は「財宝なくしたけれど，又稼（ぎ）たらば，元の如くならん。難波に出（で）て商人とならん。」と決意する五曽次のしぶとい商人精神も記している。[14] 五曽次が大阪の商人世界でしたたかに生き抜いていくであろうことの暗示であり，秋成はその徹底した現実主義と町人的生活観を批判的に描きつつ，その存在を認める立場を取っている。その婚姻拒絶は世俗社会を生き抜く現実の重みに支えられており，五曽次像の設定は事件を単純な恋愛悲劇から救う意味も担っていたのである。

五曽次と対照的に描かれる五蔵の志向は，酒造家の継嗣として当然なすべき責務から逸脱していく方向，父親として当然に拒絶し，教戒し，処罰しなければならない方向に向かっていた。また，縁組破談後の宗との駆け落ち，隠棲の計画自体，近世庶民社会への現実的な適応の思考を欠いたものであったが，その決行を抑止した原因は何よりも五蔵の人間性そのものに存した。駆け落ちが愛情関係の継続と誠実さの証しであるとすれば，その決行は五曽次による婚姻の拒否，または五曽次の叱責と勘当の予告の時点に求められる。更に，元助・母親の黙許と，養子縁組による家業の安泰の予測による罪の意識の軽減も決行の動力となりえなかったのは，周囲の意向を顧慮して優柔不断に傾く五蔵の性格に起因する。

現象面から見れば，家業に専心することで縁組の好転と，愛情と「孝」の両立をはかる五蔵の計画は，宗の予想を越えた病状の悪化という事態の急進展の前に挫折し，悲惨な結末を迎えたことになる。しかし，この事態は五蔵には「兼（ね）て思（ひ）し事」「かゝらんと思ふにたがはざりし事」であった。五蔵にあっては，駆け落ちは当初から実行を伴わない決意の表明であり，家業専心による事情の好転が期待しがたい時，その究極の意志は宗との情死行にあったのであろう。五蔵の思考・行動への不審は，婚礼の場で一気に明らかになる。

元助が婚礼衣装に身を包んだ宗を伴って五曽次家を訪ね，婚姻の口上を述べた時，「思ひまうけざる」出来事に五曽次は激怒する。また，「おのれ等狐のつきて狂ふか」という五曽次の罵言は元助の誇りを傷つけ，事は五蔵と宗の問題を離れて，両家の威信をかけた問題に発展する。元助は五蔵の尋問を求め，求婚後も時を費して宗を死病に至らしめた五蔵の責任を問い，宗を嫁と認めて五曽次家の墓に葬ることを要求する。この要求は更に五曽次の怒りを招き，婚姻の拒絶と五蔵の公的勘当が通告されることになる。

ここで，ようやく五蔵の決意と行動が示されることになる。

> 「いか（に）もしたまへ。この女我（が）つま也。追（ひ）出されば，こゝより手とりて出（で）んと，兼（ね）て思ふにたがはざる此あした也」。「いざ」といひて，手とりて出（づ）べくす。兄がいふ。「一足引（き）ては，たをるべし。汝がつま也。この家にて死ぬべし」とて，刀ぬきて妹が首切（り）おとす。五蔵取（り）上（げ）て，袖につゝみて，涙も見せず門を出（で）んとす。

無情な父親と対決して，「この女我（が）つま也。」と言い放つ五蔵の誠意と，肉親の斬首をもって真実の愛に応えた元助の苛烈な丈夫心を賞讃される場面である。また，通俗小説的な甘美な恋愛悲劇とは質を異にする異常な緊張と感動の瞬間でもあった。

しかし，この五蔵と元助の行動をそのまま勇猛心の表出と実践として理解することには疑問が残る。五蔵への不審は，「御宿の事，よくして待ちたまへ」という元助の求めに全く応じていない心意と，死期の迫った宗を伴って家を出ようとする行動の不自然さに求められる。その心理の内面は描き足りない部分が多いが，先に挙げた駆け落ちの相談，母親に告げた情死の示唆，「父母の前にて，入さきよからんぞ，せめて願ふ也。」という期待に，「追（ひ）出されば，こゝより手とりて出（で）んと，兼（ね）て思」い続けてきた底意を重ねるならば，元助が求める婚礼後の葬送が拒否された時は，情死行が想定されていたのであろう。従って，元助による宗の斬首は五蔵には予想外の行為であったことになる。それは，「山ふかくとも，海

辺にすだれ垂（れ）こめて，世に在（る）人ともしられずとも，たゞ思ふ世を命にて，一二とせにても経なゝん。」という現実逃避と隠棲生活の夢想が，厳酷な現実の前に断ち切られた瞬間でもあった。

一方，死期が迫った妹を五蔵の妻としてその邸内で死なせることを求める元助に，不義の果ての「犬猫の」（ますらを物語）死に相当する二人の情死行は認めうるものではなかった。「汝がつま也。この家にて死ぬべし。」とは，五蔵の責任を問い，宗の死を公的に意味づける唯一の方法であったからである。妹の斬首を元助の激情が呼び起こした「無分別無思慮ただ発作的な行動」[15]と見る解釈もあるが，むしろこれは輿入れにあたって元助母子の胸底に秘められた覚悟の行動ではなかったか。埋葬費用に準備された三両の金と，「こゝにてしなせ，此家の墓にならべて葬れ。」という要求，変事の急報に「しかつかうまつりしよ」と「心得たれば驚かず」に応じた母親，「元輔は母のゆるしたる事なれば，罪あれど罪かろし。」とした公儀の裁断がそれを示している。

また，娘の輿入れを喜び祝い，嫁入りの心構えを説き，門火を焚いて送る母親の心中には，五曽次家に対する同情と憐憫の期待が存在したのであろう。「母君は必(ず)よ，いとほしみたまひてん」という言葉に，女親への切ない期待がこめられている。しかし，不幸な結末の報知にも，覚悟を秘めたその表情は動かなかった。その冷静な態度は，里長をして「鬼はかねて曽次が事と思（ひ）しに，此母も鬼女なり。」と驚愕させることになる。感情を抑制しきったその対応と，苛烈な武士的精神は，「鬼女」と呼ぶにふさわしい。

この惨劇を浄化する働きをなすのは，作品の末尾に「妹が首のゑみたるまゝにありしこそ，いとたけだけ〔し〕けれ」と記される，宗の微笑を湛えた死の表情である。その精神的充足を暗示する死に顔の微笑は，題名の根拠を示すとともに，一篇の主題を集約する働きをもなしている。

その伏線をなす宗の生前の微笑は，作品中に三度にわたって記されている。一度目は病臥した宗を見舞った五蔵の励ましに応えて，「牀は見かへりもせず起（き）出（で）て，母にせうとにゑみたてまつりて，かひがひしく掃（き）ふきす」る場面であり，二度目は五蔵の手土産の鯛を見て「打（ち）ゑみて，『よんべの夢見よかりしは，めで鯛と云（ふ）魚得べきさがぞ』とて，庖丁とり」料理する場面，三度目は輿入れの朝の「嬢たゞゑみさかえて，『やがて又参らん』とて，駕にかきのせられて行」く場面に見られる。恋人の励ましに応えて元気に振る舞おうとする可憐で健気な人間性と，土産の鯛に幸福の予兆を見ようとする必死な祈りに似た心情，そして婚礼衣装に身を包んだ満足の表情であった。

しかし，世俗に伝えられた「たけだけし」い死に顔は，生前の宗の形象と不釣り合いな印象を与える。生前の宗は病み衰えて恋死にしそうな可憐でか弱い娘として描かれており，むしろ「かたちに似ぬ心たけくて」と紹介される五蔵，「志たかき健男」と評される元助，事件の急報に沈着な対応を示した母親にこそ，「たけだけし」い精神は認められるはずであった。にもかかわらず，宗の微笑を湛えた死が「たけだけし」と評されたのは，薄幸の生涯を男への信頼と純愛に殉じた精神の充足に，勇猛心や烈性の気質などを超越した丈夫心を認めた，作者の限りない讃美と憧憬が込められたからであろう。また，それは，「かたちに似ぬ」「たけ」き心が現実社会では優柔不断に傾き，現実に対処する強靱な精神となりえなかった五蔵の脆弱な心を優しく包み，武士的な精神が性急な行為を招いた「元輔の行為の不自然さを補償」[16]する永遠の微笑でもあった。

五蔵の出家遁世が「いたいけな宗を非業の死に追詰めた事実に対する痛切な自己懺悔と，今は亡きその宗への追善の思念」[17]，及び，心のままに生きる場を喪失した近世庶民社会からの離脱を意味することは言うまでもない。

秋成はかつて優雅な王朝的世界に憧れる「蛇性の婬」の豊雄に，「雄気」た犠牲的精神の開発によって「羈物」の境遇から精神的自立をはかる若者を描いた。しかし，晩年の秋成が再び同種の若者を取り上げて，誠実で情操豊かな人間性がむしろ否定的に働き，苦悩と行動が事態解決のための何らの方法も持ちえずに挫折を重ねる人間像を描いたことは注目されよう。現実社会の桎梏のために苦悩し，悲劇を招き寄せてしまう五蔵の造型は，それと対置された捨石丸，樊噲の「剛毅木訥」（胆大小心録・161）な人間像を考えるよすがともなる。

〔注〕

(1) 「源太騒動と綾足，秋成」（「女子大国文」24，

25号，昭37・2，6）。

(2) 「いわゆる源太騒動をめぐって ―綾足と秋成―」（「文学」37巻6，7号，昭44・6，7）。以下，裁判記録の引用は同論文による。

(3) 拙稿「上田秋成『ますらを物語』論」（「言文」32号，昭60・2）を参照されたい。

(4) 中村幸彦氏『上田秋成集』（日本古典文学大系）21・22頁解説。

(5) 重友毅氏著『秋成の研究』（昭46・5）499頁。

(6) (1)に同じ。

(7) 『幻妖の文学上田秋成』（昭57・2）の「『西山物語』と『死首のゑがほ』」。

(8) 『死首のゑがほ』の本文は，文化五年本の西荘文庫本を底本とする日本古典文学大系『上田秋成集』に拠った。ただし，横書きのためくり返し記号「〈」の部分は二度書きにした。

(9) (4)に同じ，186頁頭注。

(10) 中村博保氏『雨月物語・春雨物語』（完訳日本の古典，昭58・9）270頁脚注。

(11) 浅野三平氏『春雨物語』（全対訳日本古典新書，昭56・5）106頁脚注。

(12) 棚橋正博氏『雨月物語・春雨物語』（教養文庫，昭55・10）184頁。

(13) (4)に同じ，190頁頭注。

(14) 最終稿本（天理巻子本）の断簡には五曽次の末路と葬送のさまが記されている。

空しく成たりと人告たれと一族たれもたれもにくしとて問もゆかす　五蔵法師は父なれは舟のたよりもとめて行　死からもとめて又舟にのせて庵にかへり是も冢ならへてつきたれと宗か墓は改葬といふ事してすこし隔て祭りたり　よろづに心ゆきて行ふ

斃死とみる見解（中村博保氏『英草紙・西山物語・雨月物語・春雨物語』539頁頭注）もあるが，ここは，五曽次に対する一族の嫌悪の強さと，五曽次と宗の墓を隔てた五蔵の「よろづに心ゆき」とどいた処置の強調を示すものであろう。

(15) (2)に同じ。

(16) (7)に同じ，226頁。

(17) 鷲山樹心氏著『秋成文学の思想』（昭54・1）「『死首のゑがほ』と仏教」。

59・11・30稿

A Study of "Shikubi no egao" in *Harusame-monogatari*

Toshikazu KATSUKURA

"Shikubi no egao" a tragic tale of romantic love is based upon the report of the actual event in a village on the northern outskirts of Kyoto, in 1767. The tragedy in this tale may be seen to result from Gozo's indecisive character. But the smile that remains on Mune's lifeless face symbolizes the victory of their pure love over the squalid world.